

『神からのひとりの人』 ヨハネ1:6-8

1:6 ここにひとりの人があって、神からつかわされていた。その名をヨハネと言った。

1:7 この人はあかしのためにきた。光についてあかしをし、彼によってすべての人が信じるためである。

1:8 彼は光ではなく、ただ、光についてあかしをするためにきたのである。

●序論

ヨハネの福音書は、使徒ヨハネが書き記したと言われています。先ほど読んでヨハネと名前があるのは、その筆者ではなく、いわゆるバプテスマのヨハネと言われる人で、このヨハネの福音書では、単にヨハネとだけ記されています。

この福音書の目的は、20章に記されています。

20:31 しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。

「これを読んで、信じてもらいたい！」そういう叫びが聞こえてきそうな筆記です。

そんな中で、先日は、冒頭5節までで「神のことばであり、闇に輝く光であるキリスト」について取り上げ、今日はバプテスマのヨハネについて取り上げています。

申し上げた通り福音書の著者ヨハネとは別人です。

別人ですが、ある意味同じ目的を持っている…それが今日のポイントとなります。

●本論

I. ひとりの人を遣わされている

1:6 ここにひとりの人があって、神からつかわされていた。その名をヨハネと言った。

まず、神が一人の人を遣わされたことが、記されています。その名をヨハネと呼ぶと。

マタイ、マルコ、ルカにおいて、それぞれの描き方をしながらも、彼のことを、まず特別な使命を神からいただいてこの地上に生を受けた人物と語ります。

すでに使徒たちを通して語られ、他の福音書でも語られてきたバプテスマのヨハネについて、これだけ記せば、ああ、噂のあの人のことだとわかるひとりの人です。

当時多くの弟子たちを抱え、多くの人々が彼から洗礼（バプテスマ）を受けようと列をなした…と言われた人。そしてのちにヘロデ王の手で斬首され殺されてしまったということでも人々の記憶に残る人でした。

今この短い一節で彼のことを整理して表現しています。

この人は、神から遣わされた、つまり神のご計画の中で大切な使命をゆだねられた存在であったこと。そしてこの人は、ひとりの人間であったということ。その人の名は、ヨハネであったということです。

なぜ、この福音書でもバプテスマのヨハネを取り上げているのか。

それは、だれにも知られなかった時から、神は人を備え、救いのご計画をすすめていたことの事実を示し、イエスこそキリスト、つまり救い主であることを、明らかにするためです。まさにこの福音書の目的と共通です。

20:31 …これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。

Ⅱ. 彼は、キリストを証する人である

最初に彼について強調しているのは「証しする人」であったということです。

1:7 この人はあかしのためにきた。光についてあかしをし、彼によってすべての人が信じるためである。

1:8 彼は光ではなく、ただ、光についてあかしをするためにきたのである。

「光」つまり、それはイエス・キリストを証しするために、彼は来たのだと強調されています。その光は、先日も心に留めた光です。

:4 …この命は人の光であった。光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった。

この光のことをこの福音書は、直後の9節にこう記しています。

:9 すべての人を照すまことの光があって、世にきた。

そして15節にも、バプテスマの証言をこう引用しています。

ヨハネは彼（キリスト）について証しをし、叫んでいった、「『わたしのあとに来るかたは、わたしよりもすぐれたかたである。わたしよりも先におられたからである』とわたしがいったのは、この人のことである」。

つまり、バプテスマのヨハネも、福音書の著者使徒ヨハネも二人とも同じように、イエス・キリストを光として証しする目的を持っていたということです。

まさに

20:31 …これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。…とある通りです。

Ⅲ. 彼自身は光ではない

当時の人々にとってはバプテスマのヨハネは特別な存在でした。

力ある預言者、この方こそ救い主ではないだろうか…という人々の期待が、彼のもとに群れを成す人々に見られたようです。

この福音書は、はっきり言います。

:8 彼は光ではなく、ただ、光についてあかしをするためにきたのである。

23節で、彼自身の言葉を紹介しています。

:20 すなわち、彼（ヨハネ）は告白して否まず、「わたしはキリストではない」と告白した。

これは、神さまが、ヨハネ自身を何のために遣わし、また用いてくださっているかをはっきり証言するところの言葉です。

「彼は光ではなく」「わたしはキリストではない」、ただ本物を、つまり救い主イエス・キリストを示し、証しするため、ただそれだけのために来たのだと言える彼の信仰による潔さと謙虚さを、わたしは心からすばらしいと感動します。

どんな優れた霊的指導者であっても「キリストにつながろう」、「自分ではなく、共にキリストにつながる祝福」を明らかにするものでなければ、それは偽りだということを知っていてほしいのです。

わたしたちもまた、キリストにつながっていて、はじめて「地の塩・世の光」とされているのです。へりくだってその恵みのもとに身を低くし、恵みを受け取って生きる…ということをお願いしたいと思います。

最後に)

名前が同じふたりのヨハネが共有したのは、キリストを証しすることでした。

20:30「…あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。」

聖書を通して、聖霊の働きにより教会を通して、クリスチャンを通して、キリストとその福音の業を示すために、今も証しが、なされているのです。

《ここでひとつの映像を紹介します。》

アズベリー大学のリバイバルのレポートです。

神学校の向かい側にあるアズベリー大学では、毎週水曜日にチャペルがあり、単位取得に必要なため、学生はいつも同じようにそこに集まる。「しかし、先週の水曜日（2月8日）は違いました。祝祷の後、聖歌隊が最後の合唱を歌い始めました。そして、簡単には説明できない何かが起こり始めました。学生は去りませんでした。彼らは、静かながら力強い超越的な感覚に襲われ、そこを離れたいと思いませんでした。そこに留まり、礼拝を続けました」…

そしてこのリバイバルの中にある礼拝は、昼も夜もずっと、もう一か月になろうかとする今この時も続いています。

その礼拝の様子は、賛美と聖書のことばの時間、そこにある悔い改めととりなしの祈り、そして次々と現れる、キリスト体験を証しする人たちです。

何よりそこでキリストが見上げられ続けている、キリストの十字架と復活が、わたしの救いと告白する人たちが続々と起こされていることが幸いです。

そうしてまことの光に目を向けて、そしてその場所から、各地に神に遣わされていく人たちが起こされていく、それがリバイバル（神のなさる信仰復興）のわざです。

神は今も証し人を起こされる。そのために聖霊（神の霊）をキリスト者に注ぎ続けています。

今も、バプテスマのヨハネのように「光について証しをする人」を、神が世界中に起こしてくださる。そしてこの教会においても起こされていく。それを今日わたしたちの祈りとしていければ幸いです。そこにわたしたちも2人のヨハネと共有できる目的があるからです。

20:30「…あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。」

